

合併まちづくりフォーラム

平成15年2月11日(火)午後3時
南部川村保健福祉センター

南部町・南部川村合併協議会

合併まちづくりフォーラム

日 時 平成15年2月11日 午後3時00分

場 所 南部川村保健福祉センター 2階 プララホール

司会 皆様こんにちは。南部梅林の梅の花も満開となり、南部郷にも春がやってきました。

本日の南部町・南部川村合併まちづくりフォーラムの司会進行を仰せつかっています、私南部川村役場の武市と申します。よろしく申し上げます。

(拍手)

ただいまより、南部町・南部川村合併まちづくりフォーラムを始めさせていただきます。

本日のテーマは、住民が描く未来の南部郷です。

開会に当たりまして、南部町・南部川村合併協議会会長であります山田五良よりごあいさつを申し上げます。

会長、よろしく願いいたします。

山田会長 先ほど会場へ入ってきたときに、いすの数を見て、こんなに並べても入ってくれるのかなって思ったんですが、満席になっていただきまして、本当に大勢のご出席を賜りましてありがとうございます。

今朝から南部梅林で梅祭りというのがありまして、内中源蔵の梅供養、慰霊祭もありました。終わるころには、バスから車から、みかえり坂を上がる人、数珠つなぎっていうんですか、本当に多くの人があって、これが南部川の一角かなと思うぐらいの大勢の人がお越しをしてくれていました。

梅の花も満開でございまして、たまたま雨降ってきたから若干困りますけれども、そんなに大勢の方がおいででくれている、私どもの南部郷の合併が今進められています。

協議会ができて、精力的に進められているわけでありましてけれども、きょうは、新しくできってくる自治体の建設、まちづくりにつきまして、皆さんとともに考える会を開催させていただきました。パネラーの皆さんにもお願いして、これから、それぞれの立場から意見を出してもらおうわけがありますが、私がいつも思っていることは、この両町村は農林水産業、工業、商業が非常に充実して発展を続けている。そして、福祉あるいは教育にいたしましても充実をしておりますし、インフラ整備にしても大体的見通しはつけてきてあります。

それでありまして、この両町村がそれぞれの長所を持ち寄って、そして、補えるところは補い合って、ひとつのものにしていけば、1足す1は2でありますけれども、私はこの場合は3にも4にもなるだろうというように思っておりますし、期待もいたしてございます。

非常に元気のある内容の力の持った新しい自治体ができると確信をいたしてございます。まだまだ時代はどんなになってくるかわかりませんが、しかし、力をつけておくことが、経済的にもすべてにおいて、力をつけた団体であり、住民でなっておけば、どんな時代が来ても、それに対応していけると、そのように思っています、この合併がそういうような方向になっていけるといように思っていますし、楽しみにしているわけでございます。

きょうは、パネラーの皆さんとともに話し合いをしていただきまして、これから、もうあと大体20カ月ぐらいになってきましたですね、大体の目標は。法律期限はもう少し延びますけれども、大体20カ月余りぐらいになってきましたので、あっという間に過ぎていくと思います。皆さんともども、アンケートもお願いをしておりますし、住民の皆さんの参加もお願いをしていますから、ぜひ知恵を出し合いまして、いい合併の方向に進んで、そして、目的が達成できますように心からお願いを申し上げまして、きょうのご出席のお礼を申し上げまして、あいさつにさせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

司会 それでは、本日のフォーラムにご出席いただいていますパネリストの皆様をご紹介申し上げます。

まず、南部川村森林組合参事の松本貢さんです。

松本 松本です。よろしくお願いします。

(拍手)

司会 松本さんは、備長炭ブームの火つけ役の1人で、炭を燃料だけでなく、その機能を生かした多方面の利用法を研究されています。

続きまして、南部町漁業協同組合参事の東本正文さんです。

東本 東本です。よろしくお願いします。

漁業の関係の話をせよということでやってきました。よろしくお願いします。

(拍手)

司会 東本さんの所属する南部町漁協は水揚げされる魚の種類が県下でも最も多い漁協で知られています。今後は、さらなる南部の魚のブランド化にと力を注がれています。

次に、南部町の猪野佳優さんです。

猪野 猪野です。どうぞよろしくお願いします。

(拍手)

司会 猪野さんは、南部町で自動車学校を経営されており、南部町まちづくり塾では、早い時期から市町村合併問題に取り組まれました。

次に、南部川村の永井恒雄さんです。

永井 永井でございます。よろしくお願いします。

(拍手)

司会 永井さんは、専業農家の方で、南部川村の源蔵塾第1期生として活躍されました。また、インターネットメールの世界では梅仙人の名でも有名な方です。

続いて、南部川村梅料理研究会の岩本直子さんです。

岩本 岩本でございます。よろしくお願ひいたします。

(拍手)

司会 岩本さんの所属する梅料理研究会は、梅を使った料理の普及と新しい料理の創造に取り組み、梅の消費拡大、PRに貢献されています。

以上、5名のパネリストの方々です。パネラーの皆様、よろしくお願ひします。

次に、本日のパネルディスカッションの司会をしていただくコーディネーターをご紹介します。株式会社地域計画建築研究所社長で、工学博士の金井萬造先生です。

金井先生は、市町村合併での新町建設計画作成業務コンサルタントとして活躍されておられ、兵庫県篠山市の建設計画も手がけています。今回、南部町と南部川村の合併による新町建設計画の作成業務もお手伝いしていただいています。

なお、南部町長さんと南部川村長さんには、助言者としてパネルディスカッションに参加していただきます。

をご紹介します。南部町長の山崎繁雄さんです。

(拍手)

南部川村長の山田五良さんです。

(拍手)

ではまず、金井先生から未来の南部郷づくりに住民組織としてどうかかわっていくかと題して、問題提起をしていただきます。

金井 それでは、パネルディスカッションを始める前に、少し共通的なテーマにつきまして、私の方から数分、お手元に資料を配っていると思うんですけども、少しかた苦しいですけども、まず確認をした上で、各パネリストのご発表を聞きたいと思います。

南部郷をどう育てていくかということにつきましては、既に、今さら言うまでもなく、きょうおいでのフロアの方々も含めて、日々やっておりますので、改めて言うことはないんでございますけれども、やはり時代背景もございまして、少し確認をしておいた方がいいかと思っております。

お手元にありますように、町村合併ということで、非常に大きな今流れになってございますけれども、非常に南部川村と南部町は順調に事が運んでいるというふうに聞いております。

ということで、本当に今大事なテーマとしましては、やはり地域の方がまず自分の足で立っていくというふうなことが問われていると。今までであれば、国とか県とか行政の力で、本当に強引に

というものも含めて、基盤整備等やりましたけども、これからは非常に財政が厳しい中で、やはり皆さんと力を合わせてやっていくと。

そうなった場合、メンバー的にも数が多い住民の力が非常に大きく効くということでございます。しかも、この分野は、単に今まででしたら生活とかいう分野だけでなしに、産業とか環境とか、そういうオールラウンドで、そういう分野につきましても住民の力をかりていくというふうな時代に入ってきたというのが21世紀の大きな特徴かと思うんですね。

産業につきましては、先ほど会長さんも言われてましたけども、非常に素晴らしい梅産業等のストックがあります。そういうことですが、もう少し総合的にどういうふうな発展させるかということが今問われていると思います。

しかも、新しいテーマとしましては、住民参加とかの話は過去からありますけど、住民が主体となってやるという、そういう時代に入ってきたということが言えます。そのときに住民がばらばらでやるんじゃなしに、住民同士とか組織同士とか行政とのパートナーシップ、連携を組みながらうまくするということが、やはり地域の総合発展につながるというふうな時代背景だということですね。

そういうことで、きょうは5人のパネリストの方が、本当に横に連携すれば一体どうなるのかということが、今回の大きなテーマになるかと思うんですね。テーマが、住民が描く未来の南部郷ということで、一人一人が描く南部郷もございますけれども、それをトータルにした場合どうなるのかというあたりが、きょうのアウトプットではないかと思っております。

次に、テーマは、住民の方にアンケートをとりました。今一生懸命集計してるわけでございますけれども、大体答えが出てます。その中でも、やはりきょうもおいでになってる方も同じだと思いますけども、共通のイメージとしましては梅ですね。梅を発展させたいというのが、全体の54%ぐらいです。もう半分以上の方がやはり梅だとおっしゃってます。

それからもう一つは、4分の1、26%ぐらいの方が生活環境とか自然、これを豊かにしたいという。先ほどのごあいさつにございましたけども、教育とか福祉とか非常によくやってるということでございますけども、やはり住民の方の関心テーマは、生活、環境、自然と、このあたりに置かれています。あと、いろいろテーマございますけども、圧倒的にその2つが大きいということは言えます。そういう中で、健康と安全安心、環境も大きな共通のテーマになってきていると。それによって、豊かな生活をさらに発展させようというふうなことがあるかと思うんですね。

続きまして、そういう中で、今回やはり地域の基盤整備とか環境整備はかなり行政がやりました。ですけど、これからは地域の運営とか経営も、各農家の方も含めて、商工業者も含めて、漁業者も含めて非常に力を出してもらってますけども、これから全体に地域の運営、経営を総合的にやるというふうなことがテーマになってくるということですね。難しいんですけども、実際それやっていこうというふうな時代でございます。

この南部郷はそういう既にストックがありますから、それをどうやって一步一步高めていくかということがございます。

それから少し視点を変えまして、今の現状及び将来の展望につきましてどうかというあたりを、

外部の者でございますけれども、客観的にというんですか、主観的に評価させていただきますと、1つは、非常に良質なストックをつくられたと。よその市町村であれば、スクラップ・アンド・ビルドということでやっておりますけれども、良質なストックをつくられて、それを発展させたということですから、その発展形はやはり、きょうおいでになってるフロアの方も含めて住民の方の力によるということが言えるかと思うんですね。

そういう意味では、例えば私たちまちづくりやりますけれども、例えば今小学校4年生の方が、10年たって、すなわちこの合併の一つの成果である10年後の評価から見た場合に、すなわち政治に置きかえた場合に、本当に10年前からどういう取り組みをやってきたかというあたりを問われるわけでございます。そういう、合併したことによって、新しい元年、スタートの年という、そういう意味で非常に大事な年かなと思ってます。

それから、新しい魅力は、当然既存のものだけではいかんわけでございまして、既存のもので横につないだり、縦につないだりしながら大きな力を出すということで、後でもパネルディスカッションの大きなテーマとして挙げたいと思うんですけれども、この辺が大きいということと、そういうことで、より総合化して価値をつけていくと、付加価値をつけていくというふうな、日々、例えば梅産業であれば、農家の方が梅を漬けて加工品にしてとやっておられますけれども、地域がとって総合的にするということが今回のテーマでございます。それがまちづくりということでございます。

ですから、日々やっておられることを地域の全体に与えまして、地域の空間の中でやるということでございますので、そう難しいことではございません。

そういうことで、本当に力合わせながらやるということで、きょうは議論していきたいと思いません。

それから、10年先、さっき言いましたように、本当にこれやる場合、一人一人将来の姿が違っておれば、なかなか方向が違います。もちろんイメージはたくさんございますので、議論しながら、一つの大きな方向は共通のものがほしいと思います。これは大きな、今回のテーマだと思うんです。ビジョンもまだ共有されていませんけれども、建設計画に生かさせてもらいまして、今後、合併した後のテーマとして取り上げたいと思っています。

そういうことで、まとめでございますが、10年後にやはり今の子供たちが大人になって、すばらしいストックができたというふうなことにしたいと。特に、ハードなストックもございまして、ソフトなストックですね。もてなしとか気持ちの問題も大切かと思うんですね。後で、梅仙人の方にも、非常にそういう面から見て大事な指摘をしてもらいたいと思っておりますけれども、そういう、本当に10年の間に、すばらしいソフトなストックをつくっていく。そして人と人との交流によって、ハートですね、気持ちの上でつくっていくと。それが形になって、組織になって、人づくりになっていくと。こうなればほんまもんでございます。

そういうことでございますので、非常に客観条件としましては財政が厳しくなっていくという方向の中で、知恵と汗をかきながら、やはりスローなタウン　最近言葉は難しいですけども、スロータウンというのは、今までのスピードタウンとかはどんどん建設して変えていくということじゃなしに、既存の歴史とか文化とか、既存の持っている力を生かしながらやっていくということで

すね。すなわち、すべての住民が参加できるような、そういうやり方でやっていこうというのが、スロータウンの考え方でございます。これ間もなく、全国的にそういう言葉が流行していくと思うんですけども、そういうことを実際にやっておられる南部郷の2つの町村が、より発展していくということが今回のスタートだと思います。

したがって、当然、主役も住民であり、行動も住民であり、汗をかくのも住民であり、そういう可能性も高めていくのが住民であるというふうなことで、行政との連携をすることによってそれを可能にしたいということでございます。それがたくさんあればあるほど、力は強いということですね。

今、あちこちで民間企業も厳しいと言ってますけども、実際強い企業というのは、社員が一人一人、例えば誰かが言ったと。それに対して金魚のふんのようについていくというんじゃないし、社員の一人一人が、住民の一人一人がいろいろなアイデアを持っていて、それで自立してると。それが集まってるという組織が一番強いわけでございます。

そういう意味で、きょうのフロアの方も含めてまして、一人一人の知恵を出しながら、それを合わせていくのがこの南部郷というような発想でございます。

それからまた、本当にこの内部で安住するんじゃないし、外部との交流ですね、外部から吹いてくる風をやはり土壌としての地域のストックにしていくという作用があって初めて発展していくということもでございます。そういうことも非常に大切にしていきたいと思っています。

そういうことで、皆さんが持っておられる既存の培ってきたローテクですね、既存の技術を生かしていくような時代かと思うんですね。後は、知恵と汗をかきながらまちづくりをしていくというふうなテーマで、きょうの議論は進めていきたいと思っています。

時間が5時までということですので、非常にコンパクトな議論になりますので、言い足りない部分があるかと思うんですけども、またそれは、きょうのフロアのご意見もいただきながらですけども、足りない分につきましては、合併協議会の事務局の方にまたきょう以後、教えていただきながら、これから生かしていきたいと思っていますので、ひとつよろしく願いいたします。

ということで、少し長々と問題提起させてもらいましたけれども、まず、各5人のパネリストの方をお願いするのは、各持ち場の分野で活躍されていることを、お互いに他の分野、住民の方にお互いに知り合って、まずは理解しようということが非常に大事でございますので、まず最初は各パネリストの方にやっておられることを、それから提案等ございましたら、順次お願いするということで始めていきたいと思っています。それではよろしく願いします。

まずは、先ほどありましたように松本さんの方から、森林組合で頑張っておられますけれども、まずご発言をお願いします。

松本 森林組合の松本です。本来、こういう席に立たせてもらう筋じゃないんですけども、組合長さんとか、もっと私より偉い人大勢おるんですけど、私がここに座っていいんだろうかと、今でもちょっと迷ってるんですけども、実際、私森林組合で現場で活躍している今の様子を説明させていただきたいと思っています。

持ち時間が6分とか7分とか、ちょっと短い時間なんで、言いたいこと全部まとめられるかなと、全くりハーサルもなしでぶっつけ本番なんでよくわからないんですけど、とりあえずお話聞いていただきたいと思います。

まず、今回南部町さんとの合併を控えてるということなんですけども、この合併で共通していることは何かということなんですけど、もともと2つの町村ですけど、もともと皆さん同じ水を飲んでいるということですね。今この机の上に出されている水、これはアルプスの水かどっかの水ですけど、私たちは南部川の水を飲んで暮らしております。南部町の人も南部川の水を飲んで暮らしている。今回の合併はやっぱり水を介した合併であるということ。これはもう間違いのない事実で。

もともと人間の体というのが60%から70%、人間の脳みそにおいては90%が水です。この同じ水で構成された我々というのは、もともと兄弟みたいなもんなんですよね。ですから、今回の合併は本当に本来あるべくしてできた合併であるかと。私もこの合併については非常に関心を持っております。

それで、この水をつくっているのは、何ととっても山なんですよね。その山を守ってるのが私たち森林組合の仕事です。

南部町さんにおいても、また南部川の人でも、この下の地域の人たちは余り縁がないかと思うんですけども、特に高城・清川地方においては、ほとんどが山です。

ちなみに山の面積、南部川村では大体9,000ヘクタールの村の面積のうち7,000ヘクタールが山林です。もちろん、針葉樹、広葉樹含めてですけども。山林の中で人工林、森林組合が中心となって、戦後植林されました。というのも、戦争中に日本が戦争によってほとんどの家が壊滅状態。戦後復興しようということで、国内の木はほとんど建築用に回されました。もちろん戦時中にも木材需要がありまして、ほとんどの山が丸裸状態になったわけです。それで、国の政策のもとで、これではいかんと。日本に緑をとということで、全国植樹祭が始まり、それを契機に拡大造林という方向で、国の政策のもとで、森林組合が中心となって植林を行ってきたわけです。

大体、昭和30年から40年にかけて植えた山がほとんどですけども、それらが今南部川村では3,900ヘクタールぐらい、山林に占める割合では55%ぐらいです。これがほとんど人工林ということです。残されたのは天然林ということですけども。隣の龍神村なんかにおいてはほとんど人工林なんですけども、南部川村は、そういうことで人工林と天然林とが大体半々ぐらいでやっております。

南部川村の森林組合の今の事業というのは、そういった戦後植えられた山を植っぱなしではだめなんです。やはり大根でも間引いていけば太くなるように、杉やヒノキもやっぱり間伐して、木を太らせないとだめなんです。そういうことで、適正な山の維持管理を森林組合が中心となってやっているわけです。

これは、南部川の森林組合だけではございませんでして、全国の森林組合、今こういう仕事をずっとさせてもらってるんですけども、今日本、長引く不景気で、本当にいつ景気が回復するのかというときですけど、林業の方は、それ以前から、日本が今から10何年前、パプルの時代でも山は景気悪いなという話ばかり今も続いて、もう30年ぐらい近くなるんじゃないかなと思うんですけども、そういう中で森林を維持管理するというのは、今すごく厳しい時代を迎えております。で

も、山を守っていくということは、ただ材木を生産するだけではなくて、先ほど言った水の資源を確保する、それと土砂の流出を、災害を防ぐというものと、それから最近よく言われてる地球環境、地球の温暖化防止、二酸化炭素の吸収、固定化という部分で、今森林というのはすごく見直されております。

そういう面でも、国の政策でも、今環境には非常に強い関心を持っていただいております、山の適正管理の方についても、非常に積極的に予算を投じていただいております、山の復興というのは進んでおるとい状況です。

それから、南部川の特徴としましては、林業と言えはもうこの備長炭しかないわけです。今職員の話しましたけども、もともと南部川ではなくて、日本じゅうどこでも炭焼きというのはありました。これは、日本の生活燃料として、石油や石炭が使われる以前からの話。日本人はこの炭なしでは暮らしてこれなかったということで、日本じゅうの山村にはほとんど炭焼きさんがいて、山の木を伐採して炭を焼いていたと。そういう時代がずっと続いていったわけなんですけども、戦後、高度成長から炭の姿はめっきりどこの家庭からもなくなりました。それで、炭焼きさんも当然いなくなりました。

ただ、この南部川村においては、梅がそれから発展してきましたので、炭焼きさんたちも都会へ出ずに、南部川村にとどまって梅生産をしながら、少しずつ炭焼きも続けてきたと。それから今日木炭ブームっていうものがまた起きてきたわけです。

いち早く南部川村に梅をつくっていた炭焼きさんが、すぐにこの備長炭の再スタート切れたわけです。ですから今日の備長炭の日本一という地位を今私たちの村が築いているわけなんです。

それとやっぱり今でも梅と兼業でやられておりますから、非常に基盤がしっかりしておりますから、皆さんが安心して村に定住してるということで、南部川村においては、現在も備長炭の日本一ということで、私ども森林組合も林業の管理するとともに、今清川に平成3年に建てられました備長炭振興館、皆さんもう行っていただいた方も多いとかと思いますけども、そちらの方で管理人として、一応滞在させていただいております。

それで、私たちも本業が備長炭って言うぐらい、今備長炭に力入れております。なぜならば、やはり今の時代の流れというんですか、それがやっぱり非常にこちらの方に傾いているから。自然を大切にしよう、やっぱり環境を考えようという時代の中で、環境という部分とこの炭というのが非常に共通してる。これでほとんど今の問題が解決できるんじゃないかという、非常に国民の期待が高いわけですね。そういうところで、今備長炭の方にも力を入れております。

当然、町おこし、村おこしの中でもやっぱりやらせていただいております、地元企業との連携もやらせていただいております。まだ町村合併はこれからということですけども、私たち企業においては、既に南部町の紀伊合織さんと提携しまして、備長炭と繊維産業、繊維とを組み合わせた備長炭繊維というのを作りまして、こういう、これは一つの商品ですけど、これは備長炭の靴下です。あとは肌着だとかサポーターとか、もういろんな製品が今できております。それに、今ちょっと手元に持ってないんですけども、この冬に松下電工さんから備長炭カーペットというのが発売されて、これは私どもがつくってるこの繊維を使っております。非常に松下電工さんの方も、紀州の

備長炭、しかも南部川の炭にこだわるという、ああいう企業ですらやっぱりそういう本物にこだわり出した。これは本当に時代が大きくやっぱりそういうふう到我々の方に傾いているんじゃないかという、そういう我々真ただ中でやらせていただいているんで、本当にこれから将来、この備長炭の振興というのに非常に明るい未来性を持っているわけなんですけども、今のところそういうぐあいで、山の方、それから炭の方、仕事させていただいております。

今後とも、合併しても、特に水という部分で、南部町さんとは非常にかかわりの深い関係になってくると思うんで、山の大切さというのをもっともっと村民や町民の人に理解していただくような努めさせていただきたいと思います。

えらい時間がちょっとオーバーしてしまいましたけど。

金井 ありがとうございます。今、松本さんからおっしゃられたのは、南部町の方から見ましたら、当然山ということで少しご理解をいただくということで、少し深く説明されました。森林の役割もありますけど、日本一の備長炭というのはやはり地域の誇りだと思うんですね。

後でまた必要あれば、先ほどの肌着とか、そういう生活文化に少し燃料から、そういう方向に行ってるということで、健康のテーマかと思えますけども、そういうことで、続きまして、先ほど水を通して、川、海ということでありますので、東本さんに、漁協の参事さんでございまして、水での活躍のテーマを少し紹介をいただくと。特に、南部川村の方には、ちょっと海ということは区域と違いますけども、ご理解いただくということで、2番目ですね、東本さん、よろしく願います。

東本 それでは、時間までご静聴お願いしたいと思います。

僕は、昭和53年に今の南部町の漁業協同組合にお世話になって、丸24年、今25年目になってます。それで、いろいろ組合の方も皆さんご存じのように、場所は南部町堺にありまして、本所は南部町堺です。それと支所が埴田にあります。それと集荷場というのが岩代にありまして、3つ事務所的な部分がありまして、それとあと、漁港につきましては、岩代、それと大目津、埴田、西堺港、堺の本港と5つの漁港がありまして、漁港の形をとどめてる、とどめてるといふか、漁港の格好してるのはそのうちの3カ所ないし4カ所ぐらいかなというように思います。

ただ、この組合の方もいろいろありまして、全国的に皆さんもご承知のように漁獲量の減少とか、漁場の悪化とか、そういう深刻な問題もある反面、やはり組合も地域住民の方々含めた中で活動していかないと、そういうことがこのごろ言われまして、実は、きょうはいろいろ組合のことで、漁獲のこととかいろんなこと話したいなと思うんですけども、時間的にも余りないもので、去年、観光漁業ということで体験漁業なんですけども、県の方からモデル事業という、モデルというのは去年初めてやるということで、南部と白浜、それと南の方では太地とか宇久井さんだっと思うんですけども、そういうことで、体験漁業に取り組んで、1回そういうことから地域に根ざした漁協への発展につながっていかんかなという、そんな話がありまして、それを受けて去年やりました。

その内容について少しお話させてもらいます。7月の20日を皮切りに、8月の10日と11日は抜かして8月25日までの計10日間やったわけなんですけども、これには、初めての試みということあって、なかなか職員だけでも無理やし、組合員さんだけでも無理やし、それでまた男ばかりもできんということで、婦人部さんなんかの協力を得て、初めのうちはできるのかなという話やってんけども、これがやっぱり、僕これトータルして最後に思ったのは、やはり人間、やる気のある方があればそこへついてくる方は必ずあると。

だから、組合員が今 182名おりますけども、そんな中で堺を中心としてやったわけで、そこへやはり堺の組合員の方々、あるいは婦人部の方々が協力してくれた。それに県の方も町の方も、それとみなべ観光協会の方々なんかのいろんな皆さんの協力を得てやったわけなんですけども、これは、新しい組合の取り組みというか、そういう形になっていくんだろうなというふうに、職員の立場としてそういうふうな感覚を受けたわけで、自分自身は感動しました。やり終えたということで、目標が大体集客数 500人見込んでおったんですが、最終的には 622人という方がお越しいたいて、特に県内外の方で、那賀郡の方とか和歌山、大体海に余り触れ合いのないの方々の方が多く来ていただいたなという感覚で。

どういうことやったなんてことになると、皆さんも聞いたことあると思いますけども、漁業するのに漁業権というのがあるんですよ。それは、各漁業種類、あるいは魚種を決めて、この魚は漁業者の生活の糧になるんで、獲るの遠慮してくださいよということで区域決めてます。これは南部町だけじゃありませんけれども、各そういう浦々でそういう漁業権というのがあるんですけども、なかなかそこへ人が入ってくるというのも難しいというより、ちょっと入りにくいよという方々もおられるんで、その期間はそこをあけて、その磯で遊んでもらう。

それと、漁業者が常日ごろから漁業している漁具と漁船を使用していただいて、今でいうほんまもんの体験をしてもらうという。そういう体験を通じた中で、漁業者とそして来られた地域あるいは県内外の方々に少しでも漁業というのを理解していただくこと。

それと、漁師料理体験というのもやりました。今回のメニューは4つのメニューあったわけで、一つには、生涯学習の関係も含めて、磯の資源の学習ということで、磯に住む生物 動植物ですけども、そういうふうな話から、それと今言うた料理体験、それと漁業体験、そういうのを取り混ぜて一応やったわけです。

それで、結局、今後やることについては、いろんなアンケートいただいて、よかったって言ってくれた方が多数ありましたので、ことしもそれに組み込んでいこうかなという話はしてますけども、まだまだ全体的な話もまとめておりませんので、この席で僕がそういうことを勝手にちょっと言うわけにもいきませんが、やはり新しい漁業のそういう地域の方々との触れ合いをつくる、一つの事業として取り組むのにはふさわしい、今後の漁業の一つの取り組みかなと思います。

1985年、古い話になりますけども、この漁業サービスという言葉があらわれまして、漁業サービスから漁業という言葉から海業という言葉に、その活動というのが大幅に変わってます。

それはどういうことかと言いますと、海を広く活用した総合的な産業にしていくんだと。これを皮切りにされたのは、三浦市の市長の方がマグロの関係でいろいろ停滞してきた中で、何か新しい

やつを取り組んでいかないかなとということで、考えてやられたことですが、うちの組合も一応副業的な形の中で取り組んでいきたいなと、そういうふうに思ってます。

時間がそろそろ来たんで、まだいろいろとしゃべりたいことはありますが、組合も生産活動のほかにこういうことをしておりますので、そこら辺もちょっとご理解願えたらなと思います。

それと最後に、合併のことについて、一言だけ言っておきたいことがあるんですけども、南部町長さんは、小さくてもきらりと光る町という言葉で、こういう合併のことを言っておりまして、それと、南部川の村長さん、僕直接は話はしてないんですけども、仲よくしていきたいんだと、そういう話も聞かせていただいた中で、やはり元気でいつでも輝いている人たちの住む町ということで、きらりと光る町、僕はそのように理解して、自分自身が光ってもいきたいし、またその光った光をまた相手にも与えていける、そういう関係になりたい。

それと、仲よくするということは、いろんなことがあってもやっぱり人を思いやる気持ち、人の立場に立って物事を考えるということが、僕は一番大事ななと、そういうふうに思っておるんで、そういうことから、もうあと一つそれにプラス、心が豊かに育つ町になっていきたいなと、そういうふうに思います。

ちょっと漁業から話はそれましたが、ちょっとこれ僕きょうは言っておきたかったんで、それが正しいかどうかわかりませんが、個人的な意見として、ちょっと発表させていただきました。

ご静聴ありがとうございました。

金井 ありがとうございます。一応そういうことですので、海の、今おっしゃったように海業なんだってなってきましたと、漁業は漁師のものだとか、非常に危険が多いとかですね、そういう話が一般的なんですけども、先ほどの話にありましたように、体験を通しまして、また海の魚を使った料理ですね。漁師の方がどういう料理をつくってるのかということで、そういう本当のほんまものの料理を体験することによって、非常に身近に漁業とか魚とか海業をわかるようにするというところで、後でまたいろいろお互いに交流するというところで、問題を投げかけたいと思うんですけども、2人の首長さんの方に出ました意見については、後でコメントでまた触れていただくことにしたいと思います。

続きまして、猪野さんの方から、まちづくりとかいろいろそういう分野で活躍されてますけど、そういうあたりからの問題提起をお願いしたいと思います。

猪野 私は、南部町でいきいきタウンマイみなべ推進まちづくり塾という、非常に長ったらしい名前の、いわゆるまちづくりの組織に10数年前から入らせていただいて、その組織はいろんなことに取り組んできたんですけど、最低っていうんですか、組織そのものがいわゆる商工会の青年部のOBのメンバーが中心になって、そういうことを通したまちづくりに貢献できないかということで、ずっと取り組んできました。

その中では、例えば公園の掃除から始まって、吉本興業のタレントさんを交えた講演会をしたり

とか、思いつくところ思いつくところで、とにかく何でもいいからやってみようということで、ずっと活動してきたんですけれども、先ほど司会の方からお話ありましたとおり、平成11年度ぐらいからは、それまで南部町の実態とかいろんなこと調査をしております、その中で広域合併というのが、そのうちに避けて通れない問題として直面してくるんじゃないかということから、南部町の役場の助役さんの講演会を皮切りに、大学の先生とかいろんな人の講演会も開催をいたしましたし、また、現実に自分たちで四国で現在合併に取り組んでおる町村に視察に行ったりとか、そういうことで、ほとんどここ二、三年間というものについては、いわゆる市町村合併のあり方についてということで、私たちに勉強を重ねてきました。

そこで、この場でこういうこと言うのおかしいんですけども、いわゆるまちづくり塾の14人のメンバーの総意として、これは去年ですけれども、我々としてはこの合併については、今進められているその当時ですよ、進められている、いわゆる田辺市を中心とした人口10万人規模を目指した大きなまちづくりをすべきやないかと。そこに加盟していくべきやないかということで、町に対してお願いをしたこともあります。

でも、結果として、南部、南部川両町村は、いわゆる小さくてもきらりと光るまちづくりということで、今進められてる合併を選択したわけです。ですから、今私どもは、その中でそしたら我々はどうしていくべきかということについて、集まっているんな話をしているんですけれども、その中で特に、ここで住民組織としてどうかかわっていくかという中で、先ほどもちょっとお話をさせてもらいましたけれども、もともとの団体のたてりがいわゆる商工を中心とした団体でございます。それで、広域合併のいわゆる法定協議会のメンバーに会長さんも参加していただいておりますので、我々はそういう声を直接、メンバーであります会長さんを通してそのまちづくりの場に生かしてもらおうやないかということで、まちづくり塾の方からお願いをしまして、いわゆる法定合併協議会、2カ月に1回ぐらい今のところ予定されていると思うんですけれども、その前後に必ず、商工会なら商工会で、会員の皆さんそれは有志ですけれども、集まっていただいて、それでそれぞれが会員の皆さんが持つ合併に対する思いとか、また要望とか、それを会長さんを通じて、いわゆるまちづくりの場ですね、ということは法定協議会の場へ生かしていただけるような、そういう機会をつくっていただきたいということでお願いをして、現にもう先日ですけれども、第1回の会合を忙しい中で会長さんに持っていただきまして、話し合いというかそういう場を持たせていただきました。また、来月か再来月か、2カ月に1回ぐらいはやっていただけるようになってるんですけれども。

ですから、私ども考えてるのは、役場から言うてきて、意見聞かれてどうこうと言うんじゃないに、これは商工会やなしに、例えば婦人会の皆さんもおられますし、またいろんな団体の皆さんおられますけれども、やっぱり先ほど村長さんがごあいさつの中で話されてたとおり、あと20カ月、現実問題としては、ことしいっぱいでほとんど新しいまちづくりの計画を打ち立てていかんなんという中においては、非常に時間的には制約された中にあるというふうに思っておりますので、とにかく積極的な声を出していきたいなというふうに思ってます。

それと、これは今目の前で南部川の商工会の役員さんもおられますし、南部の商工会の役員さん

もおられますのであれですけれども、まちづくり塾としては、本当に小さくてもきらりと光る町、そんな中で、やっぱり商工会　これは商工会だけやないと思うんですけれども、商工会も今現実に村に商工会、町に商工会という形で2つあるんですけれども、少なくともそれも1つにまとめ上げていくという方向で、少なくとも努力をしていくべきじゃないかということも南部の中では話をさせていただいておりますし、またそういう動きになってくると思う。

ただ、結果としてどうなるかわかりませんし、現実に商工会というのは、いわゆる補助金の中である程度　もちろん会費はいただいておりますけれども、補助金の中で運営をされてるという部分もありますので、その流れも含めて、とにかくまず1つになっていけるようなまちづくりをしようやないかということで、検討を始めるように要請をしているところです。

ですから、これは先ほどからも言わせていただきましたけれども、私、パネラーとしてというんですか、住民組織としてどうかかわっていくかという部分から言わせていただいたら、これは、現実には例えば、法的に1つの町村には1つしか置いてはいけないというような部分で、例えば社会福祉協議会とか、例えば教育委員とか農業委員会とか、そういう部分は進んでると思うんですけれども、そうやなしに、例えば婦人会でも青年団でも、またその他のいろんな住民組織、その青少年育成町村民会議でもそうですけどね、とにかくこの時期に、本当に新しい町のそういう組織がどうあるべきかということ、できるだけ積極的に住民の方から両町村が手を携えて、話し合う場をつくっていただきたいなというふうに思いながら活動しております。

それと、あともう一つ、特にまちづくり塾で話をしているのは、先ほどの金井先生のお話の中にありましたけれども、10年後、20年後の町の姿をどう思い描くか、それをいわゆるビジョンを持ちながら進んでいくということからいえば、私どもは、ずっと今までいろいろ勉強させていただいた中では、今の行政というのは、例えばごみの行政にしても、環境問題にしても、福祉の問題にしても、人口規模の少ないところでひとり立ちしているんな事業を立ち上げていくのは難しいから、広域でやるか、それが大きな合併をするしかないというふうにとらまえておるんですけれども、その中では少なくとも20年後、10年後へ向かうまでの今我々のそういう大きな行政というんですかね、それを単純に言わせていただいたら、日高郡を中心とした町の進め方をしていくのか　中心としたって言い方おかしいですけども、和歌山県の広域圏の中にある、いわゆる田辺広域圏の一員として、まちづくりを進めていくのかというような部分をきちっと住民が意識をしながらやっていかなんだら、将来の行政の県とか国の組織も含めた改変には、ちょっとついていけなくなるような部分があるんじゃないかなというのと、それと、もう一つ、この合併が、いわゆる次のステップのための、ということは、次また合併が、そういう話がよう出てますわね。次にまた大きな合併あるやろうけど、とりあえず南部と南部川だけやっておこうかという意識を持った合併に対する取り組みをするのか、いやそうやないと。とにかく可能性としてはどんな世の中になるかわかんけれども、極端に言えば、未来永劫我々この新しい町ですっと孫子の代までやっていけるようなまちづくりに取り組んでいくのかという部分をきちっと打ち立てたような合併のまちづくり計画というのを立てていただきたい。また、住民もそれに携わっていかなければいけないなというふうに考えております。

以上です。

金井 ありがとうございます。少し、住民が描く未来の南部郷という主要テーマとの関係も含めて、合併協議会のことの話も出ましたので、後で、町長さん、村長さんおられますので、ちょっとコメント、もしできるのであれば、その辺をしてもらおうということにしまして、私の方その交通整理はちょっとできないということで、今おっしゃってた中で非常に大事な話は、先ほど財政が非常に厳しくなってくる中、住民みずから力出していこうと。そのときにやはり、経済団体としての商工会ですとか、農協さんだとか、漁業組合だとか、そういうあたりの団体の力というのは、非常に大きな力になってくると思うんですね。

そういう意味では、2つの商工会があるということで、その連携を具体的にやはりどう進めていくかというようなことも、多分大きな課題になってくるでしょうし、合併協議会についていろいろ知りたい、意見を言いたいということもございました。このあたりも事務局の方で対応されていると思いますので、最後におっしゃったようなことにつきましては、きょう会長、副会長がおられますので、そのあたりに触れてもらえれば、後でコメントしてもらおうということにしたいと思います。

続きまして、梅仙人ということで、南部郷をはるかにエリアを越えまして、世界まで展開しております永井さんの方から、少しそういう大きめの話もありますし、また地元からどういうふうなことからステップを踏みながら、だれでも参加できるようなことがあるのかどうかですね、その辺ももし触れていただくと非常にありがたいと思います。

お願いします。

永井 こんにちは。梅仙人といいますが、夢食い虫、ふろのコメシという、ふろの湯ばっかりやというニックネームで村の方皆さん知ってて、余り嫁さん、子供がかわいそうなんで、UMEと書いて「ゆめ」、キャノンがカンノンであったのがキャノンと呼び名になったということで、ちょっとキャノンの会社の名前を借りまして、結局は梅仙人になったということが、そのいきさつであります。

私は、結論から言いまして、大きな話が好きで、ちっちゃい話はまず嫌な方でして、結論から申しますと、私は今長年、安藤直次から始まって梅づくりをずっとやってこられた。そして南部の海岸のきれいな青い島に浮かぶ聖なる島という、昔から、平安町時代から言われてきたという。それを世界に一挙に伸ばしていきたいと。これただ私に後残された7,000日しかしかの20年そこそこですから、7,000日を既に切ったんですけども 予定からすればですね、その間にどう燃え尽きるかというのが私の今の人生だと思うんで。

そこで、私の結論から言えば、梅をローマ法王にまず食わしたい。これ一番簡単にわかるんです。アメリカのブッシュの口にねじ込んでやりたいんだというのが、これが一つの目的。これだけ言えばはっきりわかるんですけどね。その手順をどう追っていくかということになってきたところに、今私のやってることが少し理解してもらえるんじゃないかということで。

しかし、この裏側には私一人でやったのではなくて、源蔵塾とか、この村の地域の方々が陰なが

らつぶれないように、つぶれないようにという形で心から支えてくれたという、これは本当にありがたい、浄土の里、南部川村の基本に流れてる精神理念というものはすごいものだなど。これさえあれば、少々ことは難関でも飛び越えるだけのみんな精神っていうのを持ってるといふの、この浄土の里というのには非常に感謝して、いつも涙出るぐらいうれしい思いであります。

一つは、私はそういう意味で、ちょうどこのきっかけは、南フランスに作業小屋というのがあります、そしてブドウのとれるころには感謝祭というのがあると。それから物まねをいたしまして、自分にそんな頭ありませんから物まねをいたしまして、山へ小さなあばらのそこの掘りたくった家を持ってきて立てて、そこへ若い学生をためて、それらに出世払いということで、ただで飯を食わせて、一宿一飯の義理と温情を売って、将来はひとつ助けてもらうようにするには、これはどうなんだと。これは庶民だっただけだっただけじゃなくかということで、筋肉食わしても備長炭なんてうまいのがあるから、これはA級品の肉になると。お米なんかも、自分の隅っこにあるくず米持ってきても、学生の時代は何でも食うんですよ。ここへも学生来てると思いますが、喜んで食うんです。

だから、それを南部川のいやしの里南部、浄土の里というので、自分のこと気持ちを兼ねた形の中で、梅を側面から演出していく方法をとるのが一番利口じゃなかるうかという、私の独自の考え方でありましてね。

それで、私は山小屋へ10年ほどかかって、皆さんとおつき合い、その間旅行もできなかったし、釣りにも行かなかったし、本当に変わり者で徹底して通したということで、そのおかげで早坂暁さんが、夢千代日記の方が2回もこちらで、金ないんだったらない分だけ行ってやるよということに来ていただいたと。

それで、先日も紀州に梅酒のつくれる里にあって、世界の中で紀州の梅酒やと売り出すことぐらい、だれだっただけじゃなくか、どこのすのこに寝てるのにということで、皆さんからすのこに残ってるやつをいただきます、一番いいのが40年製のをもってきてくれたおばさんがあったわけですよ。それで、先日も、米長将棋名人がちょこに1杯もないんですよ、割り当ての。それを飲み飛行場行って、羽田から白浜空港へ来て、日帰りしてお帰りになられたと。我々のところへ非常に、いわばありがたい特産物のおかげで皆を引き寄せる魅力があるというところにあったわけですが。

私は、山小屋をつくって、皆さんに学生さんとか、あるいは南部川村のきょうも梅祭りあったんですが、いろいろな方が来られたときに、宿代がなくて泊まる場所がないんだったら、日本の梅の里は金があるだけじゃねえんだぞ、物があるだけじゃねえんだぞと、心も優しくて温情なところなんだと。そのときはぜひ梅仙人の宿をたたいてくれということで、何人かお泊まりしていただいたという。

それで、近所の方が、このトマトを食べてみんかとか、このイワシおいしい南部の一夜干しを食ってみんかということで、皆さんの心に触れて、それにほれ込んだ連中が専修大学のエーデルワイスというのが、ちょうど10年間ずっとこちらにも来ていただいて、そして皆さんとありがたいところに南部川村の若者と、あるいは田辺商工会議所の連中とか婦人層の方とか皆さんと心の触れ

合いをしまして、既に私とこから遠くへ行ってしましまして、今日も大阪外大の学生が来て梅まつりを手伝っているのしょうけど、部屋の窓だけは開けておくと、お互いが、皆さんがそですり合うも縁のうちに入りましてですね、おかげで仲間が清川から徳蔵、南部町というふうにして幅を広げていってくれてるという。

まずはアンテナショップとしては、非常に酒蔵といい、みんなの心の気持ちというのよく見てたら、私は南フランスの作業小屋というものが、決してこの地域でもできんことはないなと。畑の中に山小屋というのが山の間引き材で立てたものを皆さん持ってますから、それにいわば、今度は行政とか皆さんのおかげで高速道路ができた。大阪から2時間ぐらいで来ると。そしたら、結局ゼミの里とか、あるいは研究のメンバーとか、そういう者が日曜日だから、土曜日だからちょっと南部行ってこようと。帰るときは必ず、梅というものを産地知ってますから皆さん持ってかえるわけですね。

だから、そういう地についた私たちの空き地の空間を利用して、自分たちの平生は使っていない梅蔵の2階とか何かを使いながら、これからは阪南大学とか、あるいは阪神大学とか、この京阪神地区が身近になったところを効率的に使いながら、そして彼らの持っている醸造技術とか、あるいは工業関係の技術とかノウハウを、彼らが遊びに来ればみんな出すわけですよ、結局。だから、大阪外大の学生さんなんかもちこちに来ましても、梅パンをつくったり、一口ワンタンめんをつくったりして、彼らがだれもこちらの村の者がだれ声かけるじゃなくして、彼ら自身が皆様にお世話になったお礼にということで、向こうで学園祭ですつとやってくれてると。

東京では、こちらの者が宣伝に行くと、必ず専修大学の学生がお手伝いにかける。そういう中、人間関係が非常に頻りに身近になってきたというところで、これはひとつ、私は今後合併をして、南部の夕日のあのマルタ島に似てるらしいんですけども、国民宿舎の西側見れば非常にマルタ島に似てると。この夕日は、バリ島にいてる日航のJALの社員の娘さん言うのには、これはひょっとしたらインド洋のバリ島よりも、この南部の国民宿舎からの夕日はバリ島以上だぜっていうことなんですね。長年バリ島で生活されたから、これうそじゃないですね。

だから、そういうこともひっくるめて世界に情報を発信できる我々のそこらじゅうにころころするほどの手前には財宝が転がっていると。今までそんなもん拾わなかった、別に用事がなかったんですけど、今探そうと思ったら歴史的な有形無形のもものがたくさん転がってるというところがあるからですね。

そこら辺で私は、インターネットというのが、先ほども梅仙人ということでも言われたんですけども、これは、言うのと書くのとただでございまして、夜の寝てる間に書けば10円で、ロンドンからアメリカからニューヨークから始まって、アフリカの端まで飛んでしまうと。そして、恐らく世界の中で、梅林というのをやってるのこの南部川、南部の谷だけやと思うんですけども、カナダから梅を見ましたとか、あるいは横浜のビルの中から観梅をしました、大分咲いてますですなとか、高速回転のライブカメラが右上下に頭を振りながら、こんにちは毎度おおきによと南部の梅見せてもらってますねんけどという形で、山の上くるくる回ってるっていうの見たら、恐らくそういう情報というのは、案外軽く見ないで、利用するということがこれからの我々の日本、あるいは世界に伸

びていく。それはいえば、地域の、北海道の端から、ちまたに皆さんの多くの師範を、だから私は紀州南部梅仙人じゃなしに、紀州紀の国紀伊の国熊野南部の梅の里ということで、皆さんほかの人黙ってますから、そして、紀州の南部っていうの、和歌山県知らんでも南部だけを売り出したいというひとつの意気に燃えてるわけなんですけども。

そういうひとつのこれから合併されました南部町の海というのが、今までかつて平安の時代は、南部と南部川村と同じであった南部荘園だったんですけども、それが1000年ぶりにまた復活して一緒になっていくと。だから、いわば海というそのところを利用させてもらいながら、白浜ビーチというのを、これを42号線の一服休憩するところなんていうのを浜を利用すると、非常にのどかな里づくりができるんじゃないかと。

だから、そこに皆さんを集めることにより、皆さんがそこに南部ファンになってもらう。バーチャルの人民をもっとふやしていくという意味が非常に効果があると、僕出てくるんじゃないかなろうかという夢と希望を持ちまして、私は、これからの自分たちの今できるところ、そう遠くに青い鳥というのはあるんじゃないかと、これだけ国が県が金がなくなってしまうという、今まで甘えて、くれよ、くれよって言うのがくれなくなってきたら、自分らでやれよというのがこの合併だと思っんですけども。だから、そこら辺をすれば、自分たちの身近の中に数多くのものを、手近に息を吹きかけながら、魂を吹きかけながらいくと新しい展望が必ず、コンサルタントの先生方に怒られますけども、先生のお力をかりなくても、自分たちで今までのものを掘り下げながら、世界の中に君臨することのできるような大きな財宝が私は眠ってると思うんですね。それは一体なんであるかということで見てみたら、私は目下インターネットというのをライブカメラと併用しながら、使いながら、南部の夕日のきれいなのを、バリ島より以上にきれいだなと、南部のイガミは天下一品うまいんだということをどんどん皆さんで発信して行って、ハンドルネームをそこで使いながら、そしてその、いわば君臨たる和歌山県を知らなくても、どこを知らなくても南部川村だけは知ってるよ、南部は知ってるよというような形に、そういう理想を追い求めながら、あとの残された7,000日有余の、飯食っても3回食ったら2万4,000回しか食べませんんですけども、その限られた時間内を泳ぐだけ泳いでみたいというふうなのが、私のこの世で梅干しを食うて今まで大きくさせてもらいました私のこれが最後のこの世でのお返しだと、そういうふうに私は念願しながら思うわけです。

偉そうなこと言いましたけど、時間過ぎましたので、そういうことでどうぞ。

金井 ありがとうございます。皆さん、ちょっとネクタイを注目してほしいんです、永井さんの。梅にこだわらして、きょう晴れの舞台で仙人がネクタイをして背広着てるということでございますけども、本当にすばらしいなということで、今のお話聞きましたら、本当に自分でできること、住民一人一人ができること、情報化社会における発信ということで、しかも学生さんとかの体験ですね、そういう実習だとかそういうことをやられてるということで、私も観光研究学会の役員なんかずっと10何年間やってるんですけども、今先生から出ました、関西でもたくさんの観光の学部ができました。だけど、就職するところがないんですね、学生さんが。何とか地域の振興について、まじめな観光ということで考えてるんでしょうけども、そういうことで今話を進めてまして、

まだ協議会には申し上げてないんですけども、本当に大学の講義をこちらで、学生さんつれてやると。しかも、地元の方と交流してもらって、本当にそういう将来南部郷で本当に骨を埋めるというようなことも、そういう希望も都市の方の大学では起こってますので、その一端を既に先にやられてるということですので、また連携をお願いしたいと思います。

続きまして、最後になりましたんですけども、先ほどありましたように、地域の主権でございまずことを発見して、それに価値をつけて発信していこうという話が永井さんのポイントかと思うんですけども、そういう意味では、梅に着目して、梅料理研究ということで非常に造詣が深いということで、最後に岩本さんの方に少しまとめをやってもらいたいと思います。

よろしく申し上げます。

岩本 皆さん、こんにちは。岩本でございます。永井さんの話のスケールが大き過ぎまして、私は家庭の食卓というぐっとコンパクトな話になるんですが、ひとつここで二、三皆さんに質問させていただきますので、挙手をお願いいたします。

家庭で梅御飯を炊いて食べたことのある方、手を挙げてください。はい。

家庭では炊かないが、外で食べたことある方。はい。

梅干し以外の加工品を梅で漬けたりいろいろなさっておられる方。梅干し以外。例えば梅ジュース、梅酒、梅エキスとかね、そういうふうなもので。家庭で漬けてつくったりしてる方。はい、ありがとうございます。

私たちの研究会が発足しまして20年になります。その間、5年間というものは会員が試行錯誤いたしまして、梅料理をずっと考案してまいりました。

それで、5年目になりましたときに、その南部川の村民センターで110名の南部町、南部川村の方をお招きして、梅料理パーティーを1,000円会費でいたしました。

そのときに、えっこれが梅料理か、こんなのあるのかということで、すごく驚きと皆さんに何か驚嘆みたいなものを与えまして、それが、それまでもマスコミはこの村に取材に来てたんですが、すごくそういう関係で南部川が一気に、梅料理ということで取材の、マスメディアの表に出ることになりました。

そうなりますと、とても忙しくなりまして、そこから5年間という10年間は、会は本当に家族を実験台にしまして、毎月何かを持ち寄って、試行錯誤して、これがいい、レシピをとっておこうということで、ずっとそういう活動も続けてきました。

実際、私たちの研究会のメンバーは、ほとんどが梅農家の主婦でして、梅をおいしくつくる、梅をつくるということが仕事であります。その片手間なんですけど、産地からおいしい食べ方を発信しなかったら消費拡大はないということを会長たちが言われまして、それで、家庭で食卓に手軽に乗せるにはどうしたらいいかと。そういうことでずっとやってきました。

それで、この会は本当に自主的な会として、昭和57年に結成される前には、県の健康推進グループということで、3年間指定を受けて、いろいろ健康についての勉強しました。そのころ、添加物だとか、農薬の問題だとか、あるいは家族の健康管理、それから一体どういうふうな病気でこの村

の人が亡くなってるかなど、いろいろ調べたんですけども、それが終わりました、じゃあこの会どうするかということになったときに、身近に梅という健康食品があるのに、どんな形でみんな食べてるってということから入ったんですね。

こんなに身近にある食品で、梅に何の成分が入ってるのよということとか、梅はどことなくあいに食べたら一番おいしいんやるとか、子供が喜ぶ食べ方はどうやると、そういうことに疑問を持った関係で、じゃあ私ら主婦ができるには、家庭でおいしい食べる梅料理やらか梅料理を研究しようと、ごく簡単に梅料理研究になったんですね。

やっぱり料理というのは奥が深くて、どんどん入り込んでいって、のめり込んでいって、私もその会に入れてもらった当時は37歳でした。現在20年になりましたから、そういうことで、47歳になったんですけども 自分は10年とっていっておりますので、気持ちは若く、いつも健康でいたいと、心はね。時々過労でしんどくなるんですが、そういうときには梅が本当に身近にあったということで、会員が一所懸命やってきました。これまで続いてこれたというのは、やっぱり家族の理解と、地域の理解と、あるいは行政とか村の手助けとか、いろんなところに私たちを引っ張り出してくださって、勉強する機会を与えていただいた。それが今日の20年の歩みになったと思うんですね。

今振り返りましたら、何かやろうと、何か発信しようとして、南部川へ行ったら、梅の何かがあるというふうにしよと、そういうことが梅人形の太西さんとか、あるいは梅染めだとか、あるいはいろんな村から梅を発信しようということで、横の連携がいつもつながったりしてたんですね。それで現在まで来ました。

そこでなんですが、私たちが20年梅料理研究会を、いろんな方の手助けによって今日まで歩ませていただいたんですが、一体どの程度皆さんが梅料理について関心を持っておられるかというのを、今会場の皆さんに私お尋ねしたわけなんです。あえて、梅干しを食べてるから別に料理にせんでもいいと。私は毎日1粒や2粒食べてるからいいって、地元の方は思っておられると思うんで、それはそれでいいんですが、案外よそのところへ講習会に行かせてもらったら、すごく梅に関心があって、高いのにわざわざ買って食べてくださってる。だからその人たちが、1粒をどんなふうにして食べてくださってるかということにいつも関心を持って、JAの漬け方の講習に10何年前に行ったときなんか、梅ジュースを漬けた後の梅はどうしてますかって聞いたら、捨てるという人もあったり、そのままやという人もあったんで、ジャムに炊いてくださいとか、もう一度梅ジュースにして絞ってくださいとか、そういうことをいろいろ発信してきたんですね。

そんなことが定着して、子供たちには、私は10何年来お手紙をくださる方がおるんですが、私は毎年梅ジュースをつくって、子や今では孫たちにも、既製のジュースは買わずに飲ませてますと。毎年梅は南部の梅をこのごろ30キロ買ってますとか、そういうお便りを6月になったらいただくんですけど、そういう方たちを全国に、私はもっともっと、本当にもっともっとふやしたいと研究会では思っております。

ここ近年、子供たち、各学校で郷土の勉強をしようということで、南部川村では以前からあったんですが、梅についての研究で、私は料理の面でいろいろ子供たちの質問を受けたり、実習に出たりさせてもらってます。

南部町の中学校にもお邪魔しましたし、各学校の家庭科の先生方がここ二、三年、梅料理を自分たちの研修材料として研修してくださったり、日高郡の家庭科とか女性の先生方が梅料理をしてくださいということで、実習させてもらったりして、今教育現場、10年後の子供たちということがありましたけども、教育現場にも入ってきてるんですが、南部郷の家庭で、ぜひ本当に家庭で梅料理を子供たちに、うちはこの料理がメインだよというのを一つ皆さんがつくってもらいたいんですね。子供たちはミツバチですので、だんだん大きくなったら羽をつけて都会へ飛ぶんです。そのときに、ずっと梅の輪が広がると思うんですね。私は、子供3人が都会へ行って、現在長男が帰ってきて地元就職してるんですが、そのおかげで、梅干しを送るところがすごく増えまして、ありがたいやら何やらのあるんですけど、南部の梅を知っていただくということで、村民の皆さん、あるいは町民の皆さんがそういうふうにして子供たちを飛ばしたら、どれだけの輪が広がるんだろうなと会員の人たちで話してるんですが、そういうことを夢見て、梅の利用というか消費拡大の輪が広がることを夢見て、世界にまで飛ばせたいと。永井さんのインターネットに乗って飛んでいるところなんですけども。

合併については、随分と梅は魚と合うんです。もうここ10何年も前だったんですが、かまぼこ業界の方とお話がありまして、かまぼこに梅肉を入れてかまぼこにしようかということを試みたんですが、なかなかうまくできないんです。たんぱく質が分離するんですかね、梅を最初の段階から入れると。でも、うまくできなかったんですけども、私は、食べ方として、いろいろかまぼこには梅肉をつけたり、青シソと巻いて食べたりしたらおいしいので、必ず小さな袋でいいから、納豆からしやとかいるんなのがついてるように、かまぼこにもそんな小さな梅肉をつけてもらったらいいかと、言ってるんですね。お魚の干物なんかも、自分とこでするときには、あの梅酢にざぶっと漬けて1日、2日干したらおいしいんです。

だから、そういう食べ方とか、あるいは海のものや山のをドッキングした食べ方なんかほとんどあると思うので、今後合併したら、今までは南部町さんだからって私たちも入っていきにくいし、眺めておったんですけども、そういう交流があれば、新しいまた産物が生まれるんじゃないかと、半ば楽しみにしてるんですね。

町の方もいろんなお店屋さんがあるんですが、私は駅前が何とかおもしろいような通りになったら楽しいなと思うんです。月に一遍ぐらい、南部の方が何とか市場みたいにして、あるいは地産地消費とよく言われておるんですが、そういう地産地ができやすい場をまた作っていったらいいなと。梅だけじゃなしに、海産物もあるいは洋服も、あるいは先ほど言われたように、炭の下着とかもあるんですね。それをまず、みんながで着てよかったですら身につけてみたらいいんですよ。これがいいからって言うて、買って送ってあげれば、またそれで輪が広がると。そういうふうにして、地元のものをもっと大事に使うというのかな。少し高い面もあると思うんですけども、育てていく。そしてそれを全国に飛ばしていけたらなと、梅料理研究会ではそんな話もしております。

又、お声がかかれば、どこへでも講習に出かけたいと思います、よろしくをお願いします。

金井 ありがとうございます。日々、長年やられてますので、本も私も読ませてもらって、本

当に、先ほどお手を挙げていただいた中では非常に当たり前のことになってるんですけども、以外と外では食べてるけど、家ではやってないということでびっくりしました。

そういうことで、梅を料理ということもあるんでしょうし、楽しくやるということですね、先ほどおっしゃった中で。それによって、本当に豊かにするのは生活ですけども、その中は食とか心とか、健康とか、いろいろパネリストの方の発言ありました。

このあたりで、町長さん、村長さんがもっと大きな夢をパネリストより持ってはるかもわかりませんが、幾つか質問的なやつも出ましたんで、それに触れるかどうかは別にしまして、お二人からちょっとコメントをしていただいた後、第2ラウンドの方に入っていきたいと思います。

それでは、よろしくお願いします。

山崎副会長 時間が限られてるので簡単に申し上げたいと思いますが、5人のお話を聞かせていただいて、松本さんや東本さん、あるいは岩本さんは、やっぱり梅にまつわる 梅けじゃありませんけれども、産業というものにかかわる。要するに、その中でアンケートでも50%以上の方が梅産業ということについて、非常に関心を持たれているということです。これは一つは、自分たちが幸せに生きていくためには、何としても働いて、そこで所得を稼げるものが、得られるものがやっぱりなきゃならん。これは、地方経済というのは何で支えられてるかということになるわけで、これは、いみじくも梅であり、備長炭であり、あるいは漁業であると。

それをしかし、どうブランド化していくのかというような形が、備長炭においてもしかりでしょうし、漁業においてもそうで、農業においては、それは典型的なブランド商品化がなされているわけなんですけど、そういう努力がされている。その可能性をみんな住民の皆さんが、私は期待をされておるんだらうと。

基本的にやっぱりどういう生活ができるのかということがありませんと、その地域に定着するって絵に書いた餅みたいになってしまうわけで、これは私は、村長さんがいつも言われているように、梅とのかかわり、あるいは備長炭の問題、あるいは漁業にしても、それが大きく第1次産業として、南部町あるいは南部川村において根づいておるといふ。それをさらに大きく伸ばしていくことが大きなやっぱり一つの合併の目的でもあらうと、そういうふうにおっしゃられているというふうに私は受けとめました。

それから、永井さんが新しい、私は夢物語だと思いませんけれども、これからの人間の生き方というのは何だろうということを提案されたというふうに思います。

猪野君の話は後ほどちょっと申し上げますけれども、いずれにしましても、皆さん、きょうは合併のことで、住民が描く未来の南部郷ということですから、どんな南部郷になるんだらうと。私は、10年後になったって、そんなにひっくり返るような、日本の国が変わるといふことは、私はこれは考えられないと思うんですね。

ただ、国が言うてることは、今までのように、国土の均衡ある発展、どこへ行っても同じような生活条件で、あるいは福祉があって、環境が整備されておるといふような、今までのような行政のやり方で、国が手取り足取りして教えて、しかもお金も出して、そして同じような国土づくりをす

るというような行政はもうやれませんかと言うてるんですね。もう借金で国も自治体も首が回りませんと。特に国は、地方自治体を助ける力がありませんと言ってるわけ。

それで、一つはそのことの財政のために、合併せな仕方ないな。合併したくないけど。大半の自治体は合併したくないんですよ。大半の住民の皆さんは合併してもらいたくないんです。今の行政ならいいというのがほとんど。私も地域を回りましたが、それありました。あるいはまた、やるなら大きくやれとかね。いろいろの意見がありましたけども、それはしかし、気をつけないかんの、お金のことばかりで合併をするというのは、絶対に間違いなんです。これは、絶対皆さん方も認識しておいていただかないかん。

しかし、我々 私も含めてですが、日本の国民はサービスをしてもらうことになれ過ぎてるんですよ、はっきり言うて。だから、物すごく日本が経済成長したときには、そのことをバックアップするだけの力がありました。これからありませんよということなんです。そうでしょう皆さん。

医療費も今度上がるんですね。けしからんと言うけれども、それはもう組合がつぶれそうになってますから、上げな仕方ないというような背景もありますよね。年金だって、国民年金を納めない人がごまんとおるんですよ、はっきり言うて。今の若い子に、私たちが60になったときに年金くれる保証なんてないと。そういうことなんですよね。試算したって納める金よりももらう年金の方が少ない。そんなばかな年金入るかって、日本の今の20代の人ほとんど年金入らないというんですよ。そういう状況なんです。医療にしてもそうでしょう。そういうことを介護保険でもそうです。日本は全部保険でやってますけど、それが本当にできるんでしょうか。皆さんどんどん負担はふえていきますよということなんです。

だから、今までのようなサービスを私は期待したらだめだろうということ。だから、猪野君に対する答えとしては、10万とか15万とか20万というのはね、なぜ人口が多い自治体の方がええかと。1つだけ際立ってることは、それは人口30万なら30万のところと、人口3万のところとの、1人当たりの行政投資経費を比較したら、30万のところの方がずっと低いんです。それだけのことなんです。要するに節約できますよと。30万になったら節約できますよということなんです。

しかしサービスは、皆さん、大きくなればなるほどサービスは悪くなりますよ。そんなええ話ばかり、合併なんかありません。それからしかし、確かに節約をできる部分ができきますから、行政水準を維持することは可能でしょうね。

だから、これ10年後の姿を猪野君にお答えするとしたら、10年後の姿を描ける人は、今日本には一人もおりません。はっきり言うて、今どんな評論家でも、日本の評論家で3年先のことの的確に当てた人ないんですよ。だから世の中物すごく、世界も変わる、そういう中で3年先の日本がどうなるなんてこと、的確に言える経済学者もなければ、ノーベル賞もらった人でもそんなことは言えません。ましてや、私たちはそういう能力もありませんけれども、少なくとも言えることは、我々南部と南部川が一緒になって、交付税なり税の保障があるとするならば、今の行政水準を落とさないようにしよう。

それと、もう一つは、南部と南部川を考えると、よそとの比較で行政水準がどうかということです。例えば、道路の舗装率はどうか、学校の状態はどうか、あるいは福祉の関係はど

うだろう、環境に対する下水だとか水道なんかはどうなってるんだろう、皆さんいかがでしょうか。私たち首長で、私がそういうことで行政水準が高いって言ったら、そらお前ら頑張ったんやって自慢するなって言うけど、自慢をしてるんじゃない。皆さん方が税金を納めていただいて、皆さん方が負担をして、今の南部町があり、南部川の行政水準があるんですよ。

そういうことは確かに高いんです。高いことは高いんです、はっきり言ってね。だから、この辺の恐らく南部と南部川の行政水準一番高いでしょうね。そらもっと高いところがあるかもわかりません。この辺では一番高いレベルでしょう。

そういう中での10年後のという形になりますと、一番はっきりしてることはね、皆さん、10年後には、今合併したら1万5,000ちょっと不足ですね、これが2,000か3,000必ず減ることは事実なんです。これは、何としても合併で大きくなったらええという話と違うんです。今女性の皆さんがいらっしゃいますけれども、本当に男女共生の社会を実現して、女の人にきちんと安心して子供産めるような社会にしなきゃだめなんです。これは、そうしないで、いままでのように、共生社会と言いながら、保育所でも何でもまだ遅れているような社会で、子供をふやせなんていうのは不可能なんです。男の人が育児しますか。今でも皆さんほとんどしてないでしょ。そういう社会から脱却していくということ。根本的に直していかないと、10年後には必ず人口だけ減るのは間違いない。日本の人口が減るんやからね。南部と南部川の人口が減るんじゃないですよ。日本の人口が減ります。

まあこれぐらいでやめますが、何なったかどうかは別として、合併は大きい方がいいとか、私は小さい方が悪いとかという、そういう単純な判断をしない方がよしいと。しかし、これからの大きな変化が起こってきたときに、南部と南部川だけで、存立自治体としてでき得るのかどうか、これは5年後、10年後になったらまた大きなやりかえをやらないかんかもわかりません。それは、時とともに、時代として対応していく。

しかし、ここでやろうとすることは、5年後にはどれぐらいのことならできます。10年後にはできませんということは、この1年じゅうで少なくとも数字で表して皆さんにご提示申し上げることはできる。それは言えると思います。

以上です。

山田会長 合併話が出て、両町村の合併協議も進んでいるんですが、私は、この問題に入っていくのに、大きな関心を持っているのが2つあるんです。

1つは水産です。漁業。南部川村には漁業、水産がありません。ですから、行政にももちろんありません。内水面の鮎の組合ぐらいですわね。全然知らんです、漁業のこと。水産業のこと。

それで、常に漁業はどんなになってるのかというのは町長さんに教えてもらってます。堺の漁協のあの築堤が、磯づくりがどうのこうのよく教えてもらうんですが、全然知らんです。知っておかなんたら合併ならん、私も合併の方へ入っていくんですから、必要ありますので、それをまずは勉強しているということ。

水産祭りというのが前に堺でありまして、私も隣やから町長が招待してくれて、行きました。シ

ラスの生、これはうまいですね。本当に、マグロのつくりもうまいか知らんけどね、シラスの生へ酢みそかけて、町長がこれ食べ言うてくれたんですよ。ほんまにうまい。いまだに私はそれが一番うまいと思ってます。南部湾でそんなもんが揚がってるんですね。その話したら、南部の井川課長が持っていったるわって持ってきてくれたことがあったんですよ。そんなにして、水産の面を勉強してる、関心を深めてるということ。

それから、もう一つはあきんどです。南部川の場合は、農業がほとんどですから、商業、工業やっても梅屋さんの方でありますから、小売業としてのあきんど。これは、あきんどカーニバルというのが南部町で、毎年ないんかな、何年に1回かありますわね。去年かおととしもありました。あったら呼んでくれるんですね。私も行って、その場に臨みまして、もちろん祝辞も申し上げますけれども、そこで、いわゆるあきんどさん、商売人、商人というのはどんなことかということ、これは関心持って勉強している。

一つになろうと思ったら南部川村の一番欠けてるところなんです。ないものでありますから、それはどうしても認識をしていかないかんということで、そういうことに関心を持ちながら、合併問題に取り組んでいるわけではありますが、町長がほとんど言うてくれましたので、別に結論づけるわけではありませんが、何というても生活していくには経済でありますから、それで、私もいつも思ってるのは、地域経済を充実、潤すのは、やはり外貨を獲得しなければ、地域経済というのは振興しない。外貨というのはドルの外貨じゃないんですよ。この地域の、南部なら南部郷の、田辺なら田辺郷の、この外から金を落とさないかんということです。それを何で落とすかというたら、今は梅が一番優秀選手になってます。ほかの観光もありますし、いろいろあります。

要は、南部郷へよそから金を落とすもろて、それで我々は地域経済を回していく。購買力も増すでしょう。

ところが、それがなかったら、少しあるやつを自分たちであるのを回しておったら、いわゆるタコが自分の足を食うのと一緒で、長いこと食うてる間にだんだんと小さくなってしまって待てる間ということになるわけですね。だから経済は、やっぱり地域の経済は外貨を、地域外貨を獲得するということをまず念頭に置いていかなきゃいかん。これは私より皆さんの方がよくわかってはるんですけども、一番大事で、今回の合併もそういうことを重点に、いわゆる地域経済ということを考えて、そして地域経済が力がつけば、南部郷も力がついてくる。

先ほど、猪野さんかな、この合併は次のステップかあるいは永久かということがありましたが、私は今から次のステップということは予定はしておりません。今はあくまで2つで南部郷をつくるべしだと思っています。

しかし、いわゆる永久ですね、時代はこういう時代ですから、いつどんなに変わってくるかわかん。その変わってきたときに、慌てて口張るようなことではいかんから、最初私のあいさつで申し上げましたように、これは南部町、南部川村が合併したら非常に力の強いものになるんですよ。今まで私も町長と一緒にやらせてもらったけど、一つのことやりながら、これ別々にやるのって弱いなということが幾らもありました。これ一つにしたら強なるんかなと。自分仕事しながら、そういうことを感じながら来ていましたので、ですから一つになったら確かにこれは強いものができま

す。

それで、将来どんなに変わってくる、また大きな合併も出てくるかもわかりませんが、それはわからないことですが、いつ、いかなる事態になりましても、要は力をつけておくことが大事。経済力にしましても、あるいは教養にしても、福祉の内容にいたしましても、それが一番大事だと思っているんですよ。

南部があり、田辺があり北に日高御坊があるわけですね。その間に挟まるわけです。力ついたら両方くわえてくれるんですよ。ちょっと言葉悪いですけども。どんなことがありましてもくわえてくれる、それぐらいの力持っておく、この合併であるし、そうしなければならないというように思っています。

それから、公共団体の合併と一緒にというお話もございました。これも私はするべしだと思いますし、法律はあるものはできてますけども、商工会さんとか、かつて観光協会が1つにならんか。村に南部川村に観光協会ないのですよ。ですから、南部町の観光協会なんか一緒にもうやりませんかというお誘いを、私いただきました。この場合はもう合併じゃなしに一緒に入っていけるわけですね。だから、合併は一体性。一つになるということですから、一体性を確保する場合には、できる可能性のものは全部一つにしていくべきだと思います。そのように思っております。

差し当たりこのぐらいで。

金井 ありがとうございます。会長、副会長、両方発言されていますので、一応、合併の意味の大切さは、お二人の話で十分だと思います。

私もここだけじゃなしに、各地の合併につきましている協力してまして、感じますことは、やはり2人の町長さん、村長さんがおっしゃったように、やはり地域で本当に自分らの産業を、自分らの力で発展できておれば、何も怖くないと思います。そういう意味では産業だと、雇用だと、経済が、みずから回っていくということが非常に大事だと思うんですね。

それからさらに、さっきから議論してますように、それとともに、住んでる方が心豊かに生活が豊かななってるという中身をもっともっと豊かにするというのが、外貨を稼ぐことでもあるでしょうし、新しい商品をつくって売っていく付加価値をつけるもとでもあるということで、議論をしているわけです。

そういうことで、一応、パネリストの方から少し出た意見も含めてお答えしてもらったということで、非常に大事な視点でございますので、ぜひご理解いただくということで。

第2ステップの方に移らせてもらいたいと思います。

先ほど、今産業問題等、両首長さんからも出ましたけども、本当にその辺のテーマが大事で、特に東本さんの方が、漁業といっても本当に複合した産業形態をとっていくんだというふうな発言がございました。

そういうことでは、先ほどからどのパネリストの方もそういう今の分野と違った分野と連携しながら、楽しい価値をつけていこうと。実際にやっていこうという話とか。そのためには地域のよさを本当に再発見して、それをもとにして、自信を持って楽しくやっていこうという話が主なことで

した。

特にその辺で、少し突っ込んだ議論をパネリスト間でしてもらいたいと思います。

先ほど、最後の方に岩本さんの方が、梅の話、梅料理の話もございました。例えば、梅を使った料理、先ほど出ました東本さんの方の漁業の関係とか、魚と梅とをどう連携させるかとか、さっきの備長炭もございましたけども、備長炭との関係とか、その辺は料理研究会の方ではどういう議論されているのでしょうか。何かございましたらちょっと発言をお願いしたいんですけど。

岩本 梅の方ですか。お魚の方ですか。

魚は本当に新鮮でおいしいので、梅料理の素材としては最適なんです。すごく合うんです。

以前、ここ3年ぐらい前だったでしょうか、南部町の漁協さんの方からヒラメでしたか、ヒラメのお料理ということで、梅料理の方へ、あれはテレビ和歌山か何かで取材があったと思うんですけども、ヒラメは淡白なお魚なんですけども、梅の大葉焼きといいまして、天火で焼くお料理がとてもおいしかったです。煮つけよりもおいしかったですね。

だから、そんなんをうまく家庭ですれば、また変わった感じでいただけますし、いきづくりにしましても梅肉とかできますし、あるいは加工品なんかに梅を使うとか、そういうことが十分可能ですし、お寿司にも梅酢を使えばおいしいですし、すごくいけると思うんですがいかがですか、漁協さん。

金井 東本さんいかがですか。イベントとかに、そういう梅料理の研究会もご参加いただいて、本当に食でもって展開するというのも、本当にこの場で約束できれば、本当に具体的な行動として、ことしからあるイベントですね。先ほど7月とかおっしゃってましたけども、どうですかね、その辺あたりは。

東本 今まで、7月20日にこだわりませんが、20日に海の日という記念日になってまして、公民館と町の母親クラブの方々、それと漁協婦人部、青年部含めた中で、子供祭りというのを開催して、その中で、漁協婦人部の方は、今言われたように、ヒラメは7月の時期はないんですけども、イワシ料理ということで、さばき方、それと料理教室じゃないですけども、そんなんをちょっとやったという経過あります。

それと過去に、先ほど村長さん言われたように、イワシ祭りということで2年間開催したという実績もありまして、かなりイワシ料理のレシピというのはあるんですよ。

それとあと、梅を使ってした料理につきましては、イワシの料理で梅とシソだったかと思えますけども、それを巻いて揚げる料理。それとあと、今タチウオの方も漁獲されてまして、ちょっと話ずれますけども、ブランドの関係から言うたら、これは個人的ですけども、個人的にはタチウオなんか南部の方でなるかなと。漁獲量に言いますと、箕島が全国で一位なんですよね、タチウオの漁獲量というのが。ただし、どこがどう違うかと言いますと、箕島の場合は、小型底引きが引いてくる魚なんで、魚体自体にやっぱり傷がつくということで、商品自体、市場価値というのがやっぱり

釣りで、うちのところでとってくるそういうタチウオの方が高価格で市場取引されているということもありまして、そんなんもあるという期待持ってるわけで、ちょっと話ずれますけども、タチウオの方も同じようにシソ巻いて、梅なんか加えて、これもてんぷらなんですけども、そんな料理というのは今現実ありますので、そんな中で、漁協婦人部の方も魚食普及ということから、お魚ママさんということで、和歌山県に漁婦連という漁業団体でつくっている、そういう婦人部の連合会ありますけども、そこで各県、支部どれだけ分かれてるかちょっと記憶ありませんけども、そこで分かれて、そういうふうな魚食普及の活動もしておりますので、これ合併を契機にやはりそうした婦人部間同士の交流というのを、これをまたお互い梅と魚ということで交流できる可能性はあるかなと個人的にはそう思います。

金井 この際、漁協婦人部の方と梅料理研究会が具体的に進めていくということで是非スタートにしたいと思います。永井さん、先ほどから梅仙人ということで、関西や関東の大学から来ているというお話ありましたが、そういう方が梅料理とか、食の方はどのような反応しているのでしょうか。

永井 自分達で梅を拾って自分達で漬けたり、私は場所だけを提供して、地域の青年と交流が深くなってきましたから、そこで梅料理を。お互いに、交流してひんぱんにやってくれて非常に効果がありました。そして、アンデス山脈の方へ、インディアンの診療に回った学生が、20日行くのに、梅干を22粒持たせたら元気で帰ってきたと。事実自分たちが梅というものに接して効くということ、昔古老が言ったと言うことで彼らが満足して実際に経験してそれをインターネットに流して皆さんにわかって頂いた。そういうことで非常に効果がありました。

金井 ありがとうございます。さっき出ました岩本さんの方の発信もしたいと言うてるので、できるだけご協力いただいて、南部郷のよさを全国、世界に発信するというので、またお力かりたいと思います。

あと、たくさん時間ないんですけども、先ほど最初に松本さんがおっしゃいました、備長炭は日本一ということなんですけども、最近の傾向は、いわゆる肌着をつくったり、生活用品ということもありましたので、その辺の今の研究段階というんですか、可能性の段階とか、食との関係でもいいんですけども、その辺の展望はいかかでしょうかね。

松本 木炭に関しては、ほとんどが燃料用として利用されているんですけども、全国で大体10万トンぐらいの木炭消費量があるということなんですけども、黒炭、白炭含めてそうですけども、そのうち約半分が新用途ということで、一番多いのは土壌改良剤だそうです。最近のゴルフ場とかそういうふうなところで大量に使われているんですけども、備長炭に関しては、もともと紀州産というのが大体2,000トンぐらい、毎年生産されてるんですけども、ほとんどが昔からの問屋さん経由で燃料として使われてます。ウナギや焼き鳥屋さんなんですけども。

そこで、我々森林組合というか、村で備長炭振興館ができてから、もう12年目になるんですけども、いろんな情報が入ってくるわけなんです。直接お客さんとの対話がそこでできてきたということで、いろんな新しい用途が情報として入ってくるわけなんです。

それで、一番早く入ってきたのが、お水に入れたり、御飯に入れたりというふうな話から始まって、振興館からそういう情報発信するとともに商品開発もしまして、年々そういうのを続けてきたわけなんですけども、入ってくる話が、我々にとっては聞くの初めてみたいな話ばかりで、耳を疑うような話も今までよくあったんですけども、聞くとやっぱりこれは何か生活に役に立つなというふうなこと、そういうことが気づいたものに関してはやっぱりみんなに教えてあげよう、みんなに使ってもらおうということで、商品化してきたわけなんですけども、その中で最近、備長炭繊維というものに着目した。

これはやっぱりなぜやったかということ、南部にそういう繊維会社があったということです。これが南部にないと、やっぱりどっかでやっていただろうと思いますけども、我々もただ炭を提供するだけであって、産業の掘り起こしにはつながらなかったらろうと思いますけども。

そういうことで、地元の産業同士が手を組むというのか、そういうことでまた新しいものが生まれてくるという、ほんまに地域おこしというのは、自分1人で考えるだけじゃなくて、やっぱり仲間、力をつけるっていうことはやっぱり仲間づくり。それから、知恵を出し合い、協力し合い、そういう中で生まれてくるもんだなというふうに感じました。

それで、その傾向からしたら、やっぱり今直接一番皆さん関心持ってるのは、この村の中では、産業の梅であるけども、その次に自然とか環境とか、そういうことをやっぱり皆さん考えていただいているということで、私もそういう結果というのを聞いてうれしいんですけども、全国的に見てもそういう傾向であると思います。

それで、やっぱり皆さん一番関心があるのが健康。その次に、環境、子供たちのこと。子供たち将来大丈夫やろか。このままで本当に明るい未来が築けるんやろうか。親やったらだれでも思っているとします。

特に、環境に関しては、地球温暖化で二酸化炭素がどんどんとふえてきていると。また、石油資源、あるいはガス、石炭資源がどんどん底尽きとる。石油資源であればあと40年、ガスであれば50年、石炭であればあと200年で使いつぶすという、そういう身近に迫ったそういう中で、じゃあ我々何ができるかというふうな立場に立って考えると、やっぱりまず節約という、むだを省く。そういうことから、やっぱり自然に帰ろう。でまた、使ったものはまたもとに戻す。やっぱり自然に返すという気持ち。こういう気持ちがだんだん、特に日本の我が国においては、そういう長い歴史の中で、やっぱり他国に侵略されたこともない、自国の国民だけでこの自然とともに生きてきた時代背景というのが、短期的な高度発展があったにしろ、やっぱり原点気づくのが、何かほかの国よりも早いんじゃないかな。

そういう視点から見て、この我が国において炭がまた見直されてきたというのも、やっぱりほかの国にない、我が国特有の特色じゃないかなと思ってます。ですから、炭に関しては、やっぱり南部、この地域が発信地であって、本当に全国に向けて、特に環境においては、自分たちの力で変え

ていこうよというふうなことを提案していきたいと思います。

使えば戻す、これはやっぱり切ったら植えるという、その循環がないと、この炭も多分底尽きると思います。特に日本の林業というのは、ほかの国に比べて、育林技術というのが非常に進んでおります。今でも海外協力ということでマングローブ植えたりとか、そういう指導に行っておりますけども、我が国においてもやっぱりそういうことで、山から木をなくさない。切っても植える。そういうことを続けていけば、これはもう持続可能な、半永久的なエネルギー源になると思います。

特に今ちょっとはやっているのは、そういうちょっと変わった使い方が主ですけども、将来本当にこれはエネルギー源になると思います。特に炭だとか、あと植物、樹木であるとか、今の草木、すべてが今バイオマスと言われてる、新しい生物資源エネルギーとして、10年先の話よく言われてますけども、これから10年、恐らくエネルギーはどんどん使い果たしてきておりますから、また原油価格なんかも多分上がってると思うんですけども、その分ぐらいの燃料価格で買える代替エネルギーというもののまた、植物を原料にしたエネルギーというの、恐らく日本から出てくるんじゃないか。もう既に京都大学でもそういうふうな研究されて、新聞発表されておりましたけども。

日本でも、昭和20年、終戦間近に木炭を液化して、液化燃料化してもう既にそれが成功していたというふうな記録も残っているそうです。現に、私も戦争当時の話知りませんが、日本に資源がないという中で、松の根を絞って油にして航空機の燃料にしていたと。それでアメリカと戦っていたと。すごい国やなど、僕らおじいちゃんから話聞かされて思ってたんですけども。現に資源のない国だからこそ、そういう新しい資源を、行き詰まったときに考え出す知恵というか、発想は、私たちの血の中にあると思います。

そういうふうなんで、やっぱりこれからますます森林というのは、エネルギー面でも重要になってくるんじゃないか、そういうふうな期待を持っております。

金井 ありがとうございます。いわゆる自分の考えとしては、燃料としての炭なんですけども、最先端は企業さんと組んで、新しい商品までつくってるということで、できましたらきょう、海も山も先ほどから出ますように、水を通して一体であるということで、議論はそこまでいきませんでしたけども、その辺の展開と、何か住民の方みずからその炭を実際に生活の中で生かしてみても、発信していくという、具体的な実践的な行動をやりながら勉強するということが、多分課題になると思います。

最後ですけども、猪野さん、ちょっと先ほど経済団体としての商工会だとか、農協さんとかの役割、非常に大きいと思うんですけども、首長さんの方も連携をしたらいいんじゃないかという話ございましたけども、具体的にやはり青年部だとか女性部の方とか、なかなか部の数はあるんですけども、横の連携がちょっと弱いように聞いてますので、具体的にそういう合併とか連携は、方向としてはありまして、どういう行動をこれを機会にやっていくのがいいのかというあたり、もしありましたらご発表をお願いします。

猪野 今現実に一番基本、例えば団体が合併する場合に、一番重大な問題になってるのは、特に

商工会の場合なんかは、いわゆる人の問題があるんですけども、両町村でどういう適正な人員配置がいいかということも十分に検討していただいて、私はちょっとわからんですけど、合併特例債というのがありますよね。そういう合併特例債を、例えば新しい建物つくるとか、そういう箱物にするんじゃないしに、合併をするために、両町村の今度の新しい町の住民組織やまた各種団体が、本当に一体となれるような、方策持てるような、そういう、例えば人件費の補助になるかもわかりませんが、そういうことを含めて、新しいまちづくりで検討していただきたいなというふうに思ってるんですけども。

それと、現実に関今、南部と南部川というのは、例えば商工会で言わせていただいたら、梅組合で1つですし、スタンプ協同組合も全く一体となっておりますので、そういう面では本当に基本的な連携を果たしていると思うんですがね、その積み上げを今後どんどんしていったら、おのずのいい結果が生まれてくると思うんですけど。

金井 できるだけ、今合併の話したの本当に進んでますから、できたら第1歩、第2歩としてさらに発展した形での話し合いとか、イベントとか考えていってもらいたいと思いません。

あと、フロアからちょっと、お時間が来てるんですけども、ちょっと延ばさせていただいて、5分、10分延ばさせていただいて、フロアからの質問とか追加意見、またはこちらにいます5人のパネリストの方の同じグループで、これは絶対言うておかなあかんということがございましたら、二、三お聞きしたいと思うんですけどいかがですか。

今までの議論ありました質問とかでも結構です。提案でも結構ですので。どうぞ。

質問者1 8人のお方の専門家のお話された後へ、全くの素人が申し上げるのまことに心苦しいんですが、産業によるこのまちづくりという観点に立ちますと、梅をひとつ、今のこの合併で紀南農協さんとみなべ農協ということが鮮明に分かれてきたんじゃないかと思うんですよ。そしたら、南部の梅だけが、みなべ農協さんの梅だけが梅で9,000円で売れると。それで紀南農協さんの梅出荷したら8,500円でしか売れんのやということで、いつまでも向こうさんも黙ってはいないと思うんですよ。今度、本宮、中辺路町、また向こうの方でも合併しましたので、恐らく南部郷の梅より向こうの方が多くなるんじゃないかと思う。今でも多いかわかりません。そういう中で、向こうさんも指をくわえてるわけじゃないし、もちろん切磋琢磨の競争は必要かと思いますが、今度その大きな競争相手が隣にいるというようなことにもなるかと思うんです。

ですからやっぱり、梅を出荷するときにはミカンの宣伝も一緒に入れようとか、炭も出荷するときにはお魚 お魚はちょっとご家庭へ入るときにはどんな形になるのか、いささか姿形は変わっているかわかりませんが、炭を出荷するときには梅の宣伝もしところ、ミカンの宣伝もしところ、そして梅のレシピもやっぱり一緒に何かのあるところ入れようと、こういうふうな方法も決して悪いものではないんじゃないかと。

いきなり、思いつくままに申し上げましたので、失礼いたしました。

金井 ありがとうございます。今の点は、パネリストの方お答えなるということないので、よろしいですか。お聞きしておいて事務局の方で対応させていただきます。

ほか。

村長さんの方から。

山田会長 田辺の方が大きくなるのでというご心配であるんですが、今の梅の生産量は、田辺市が2万トン、南部川村が2万トン、南部町が1万トンです、大体。そうすると、合併したら3万トンになりますわね。3万トン対2万トンになるんです。これははっきりしています。ですから、ご心配の向きはなくなるわけでございます。

それから、先ほどもちょっと、小さい合併と大きな合併が議論されて、今もお話が出てました。小さくとも、私は相撲の千代の富士って好きなんですよ。今は朝青龍かな。舞の海。あれは曙とか武蔵丸みたいな大きなやつを倒しているんやから、心配することないですよ。要は、力さえ持っておったら。そう思ってます。

金井 ありがとうございます。わかりやすい話でございました。ともかく、要はいいブランドつくて、競争を前にやることやと思いますので。

ほかはどうですか、二、三手短にやっていただくことにしまして。遠慮なく、こういう機会は、僕もそういうまちづくり元年という大きいこと申しましたけど、本当に行動が大事ですので、ご発言をやって帰ってもらったと思うんですけど。

ほかございませんか。はい、どうぞ。

質問者2 きょうは、パネラーの皆さんにいろいろお話聞かせてもらって、僕、清川から来てるんですけども、きょうは漁業の話、東本さんにも初めての話聞かせていただいて、本当に有意義だったんですけども、ここで書いてます中で、ビジョンの共有ということありますけども、これが一番大事な、ほんまに大事な肝の部分やと思うんですけども、一般的な事務のことであるとか、そういうのはどんどん進んでると思うんですけど、我々一般の夢であるとか、今度は新しい町になってどうしていききたいとか、そういうような話し合えるような場づくりとか、そんなような計画とか予定とかあるんでしょうか。

金井 今のご質問、事務局の方でだれがおられるでしょうか。

そういうふうな、いわゆる話し合いというんですか、意見を言ったり、いろいろな知恵を出し合ったりする場というのは、どっかで考えてもらってるんでしょうかという話なんですけど。

小谷事務局長 事務局でございます。

今の話、これから新町建設計画をでき上がった段階で、また今の部分も含めて検討させていただ

きたいと思います。

いろいろな機会をとらえて、皆様方と話し合いの場をできるだけ多くしたいなという考えを持っておりますけれども、それらに含めまして、今後検討を進めてまいりたいと思います。

金井 よろしいでしょうか。ほかにご意見ございませんでしょうか。よろしいですか。ぜひ、何かありましたら。

それでは、特に、多分押してると6時、7時になっていくということもございますんですけども、遠慮されてるということで、一応今5時5分ということで、時間をオーバーしております。

以上で、フロアの意見ということで少しとったんでございますけども、全体に後ろの方に押してきますので、以上で持ってフロアとの交流ということは終わらせてもらって、最後、まとめ的な話したいと思います。

よろしく申し上げます。

きょうは、本当に3時から2時間も超える、非常にコンパクトでございましたけど、いろいろなご意見が出ましたので、本当に各パネリストの方、それから両首長さんがおっしゃいました積極的なところは、本当にあすからでも行動に移して行って、少しでも本当に住民の力を生かしながら、すばらしい南部郷をつくると。

もっとも、もちろん10年では何もできないでしょうけど、本当にそういう体制が、人の問題とか、そういう体制ができてくるというあたりは、それ以後の発展にもつながりますので、やはり息を抜かず、本当に真剣にやっていくということが非常に大事かと思えます。

きょうの話ございましたけど、議論としましては、食文化だけやなしに、人の交流とか観光の意味とか、本当にもてなしを大事にした観光だとか、それから少し本当に地の産の食事を使った観光とか、そういう話もしたかったわけでございますけども、2時間ということで非常に時間が限られました。

その中では、基本的に各5人のパネリストの方のそれぞれの分野ですばらしい活動がありましたし、本当に2人の方が連携すれば、あしたからでもすばらしい連携の、横に連携して大きな付加価値をつけてくると。楽しい生活をできると。そういう条件が広がったと思えます。

余り確認しませんけども、そういうことを本当にきょうの機会に、皆さんの場でも明らかにしたことですから、本当に大変でしょうけども、実際にやっていくと。そういう中で、会場におられる方々もご理解いただいて、1人ではできませんので、本当に理解したグループがより多くの人を回りにつけていきながら、発言力増していくと。

先ほどありましたように、世界にどんどん情報化社会発展しますから、発信をすると。本当に南部郷をわかってくれる人だけ来てもらったらいいわけですから、そういう従来からちゃらちゃらした観光というよりは、本当に来てもらった人には、食の文化とか南部の労働とか、そういうことを知っていただいて、理解していただいて、本当にPR大使っていうんですか、南部郷のPR大使になってもらうというぐらいのことですので、そのあたりのソフトの展開を今後、協議会だとか、新町においてご検討していただくということで。

ソフトな差がいっぱいあると思うんですね。きょうパネリストの方と話し合ってるときに、いろいろ出ましたこともございます。

例えば、各お子様方がアルバイトをやってるときに、南部郷のことを知りたいというときに、本当に豊かに説明したり、一緒に案内したりすることができないということで、家庭に帰られてどうしようかということで、本当にそういう地域をみずから知って、よさを知って、やはり発信していく。そういう気持ちがあるということが今の状況かと思うんですね。そのあたりを大切にしながら、やはり世代間を超えて、年寄りの方も若い方も幼い方も、このよさを生かしていくということが、本当の住民が描く南部郷の未来像の具体的な実践だと思うんですね。

こればかりは、当然議論も要りますけど、ビジョンの共有だけやなしに、本当に汗をかきながら、確認し合いながら、一步一步やっていくということが非常に大事でございますので、きょうを機会にしまして、皆さんの力をかりながら、そういうことになるかと思えます。

これ、合併の記念でやってございますので、当面は合併の計画の中に生かしてもらおうということでございます。したがって、あすからでも結構ですから、何かご意見ございましたら、協議会の事務局の方に教えていただければ、それを生かしてやる方向で、誠意検討したいと思っております。

以上で、私の司会の部分は終わらせてもらいたいと思えます。

長時間すみません。ありがとうございました。

(拍手)

司会 パネラーの皆様ご苦労さまでした。金井先生ありがとうございました。

南部郷の将来、新しいまちづくりについて、大変熱心に、また充実した内容で有意義なお話し合いをしていただいたと思えます。

それでは、閉会に当たりまして、南部町・南部川村合併協議会副会長の山崎繁雄が閉会のごあいさつを申し上げます。よろしく申し上げます。

山崎副会長 お礼のごあいさつを申し上げたいと思えます。

きょうは日曜日であいにくの雨でございまして、お足元の悪い中、こんなに大勢お集まりをいただきました。日曜日じゃない、きょうは休日ですね。

そういうことでありまして、本当にありがとうございました。皆さん方から、パネラーの皆さん方、本当にいろいろご意見をいただきました。この試みというのは、本当に住民が描く未来の南部郷ということで、ただ、これも言いたい、あれも言いたいと皆さんもお思いだと思えますが、ただ、私たちもこれから1年間かけて、いろいろ事務的にもすり合わせをするだけではなしに、どんな南部郷にしたらいいんだろうというような形でいろいろ模索をするんですが、アンケートもとらせていただいているけども、これは、私の手前勝手な考え方もわかりませんが、これだけはやってくれよというのが余りないのかもわかりませんね。

例えば、文化会館絶対つくってくれとか、福祉の関係でこれだけは絶対につくれというようなこと、これはいろいろ考え方はありますけれども、これが、ここが一番欠けてるぞというようなテ-

マが、本当はちょっと南部、南部郷にはないのかなという思いもあります。

それは、一つは行政水準というような思いもあるわけですが。

しかし、これからやらなきゃならんことは幾つかあります。ただ、一つだけ、南部の町として、皆さん方をお願いをしたいのは、南部の町は、これはもう10数年前のことではありますが、町民集会で本当にこれから南部町というのは、人権と福祉を守っていく町にしよう。こういう町民の申合せをしました。これ、私が申し上げたんじゃないんです。住民の代表の皆さん方が寄って、そのテーマをつくっていただきました。それを南部町の一つの行政の大きな柱として進めてまいりました。そして、南部川の村長さんと一緒になって、一つは、この人権を守るためにも、特に障害者のための障害者の皆さん方に本当に喜んでもらえるような、本当にバリアフリーというものが実現するようなことをやろうじゃないかということで、村長さんと一緒にお金を出し合って、いろいろのことをやりました。

来年はまた、障害者の福祉グループホームという、福祉で障害を持つ方がそれぞれ独立して一緒に生活できるような施設を、これまた南部川の村長さんと一緒に出して、南部町が土地を提供させていただいて、つくる予定になっております。

それから、これからの大きなテーマはやっぱり、先ほどから話も出ましたけれども、産業とともに福祉と環境ですよね。福祉と環境が本当によくなって、ここに住むのが、南部というところに住むのが一番、南部郷に住むのが、南部というのは、はっきり言うて南部川の村長さんの方から、大体皆の寄り合いの中で、南部という名前だけは残そうよと、こういうことありますから、あえて南部と申し上げておるんでありますが、本当に環境と福祉を充実していくこと。いかに、お金もうけがよくても、その辺のところがちんとして、そして人を、まさに東本君が言うてくれましたように、相手の立場に立てるような人間を、これは教育の基本でもあろうかと思っておりますので、そういう意味で新しいテーマとして、私たちこれから頑張りたいというふうに思います。

村長さんは、本当に南部町のことを思って発言をしていただいております。私も、南部川村のことを念頭に置いて発言をしておつもりです。私は、南部町の職員に申しました。それは、お互いのことでも、南部と南部川でも探せばあらはありますよ。そら我々は同じ条例や法律でやってるんですが、みんな同じことをやってるわけじゃありません。いい意味でも特色でしょう。ある意味では不十分な点があるかと思っております。私は職員に言いました。そういうふうなところが少しでもあっても、南部川のことの村政について批判をしたら、南部町の職員はやめてもらうぞと。それは、職員全員の前で申しております。そういう南部川の村長さんも同じだと思っております。

幾つかのこれから議論を重ねまして、すばらしいまちづくりのために、皆さん方にお示しできるように努力をいたします。今後ともいろいろ皆さん方からも忌憚のないご意見を賜りたいと思っておりますし、そのための事務局であり、我々でございます。どうぞ、よろしくをお願いをいたしたいと思うのであります。

それから、蛇足でありますけども、南部川村の村会議員の選挙、南部町の町会議員の選挙が目前に迫っております。大いに、あと1年半の任期やということもあろうかと思っておりますけれども、本当に進んで出ていただきたいと思っておりますし、そういう皆さん方と一緒にやらせていただきたい

というふうに思っております。

今日は、本当にありがとうございました。そして最後になりますが、金井先生、コーディネーターとして素晴らしいまとめをしていただきました。パネラーの皆さん、本当に私も感激をしながら、もう一遍松本君のように、東本君のように、猪野君のように 永井さんは余り年変わりませんけど、この3人のようにもう一遍若返りたいと思いました。

本当にどうもありがとうございました。

(拍手)

司会 以上をもちまして、南部町・南部川村合併まちづくりフォーラムを終了させていただきます。

皆様、本日はどうもご苦労さまでした。

午後5時10分 終了